

# 日本の石橋

## 「石橋の貴婦人」鳥居橋 洪水に耐え築造100年

宇佐市景観審議委員 向野 茂氏  
むくの



1916(大正5)年架橋の鳥居橋(大分県宇佐市院内町香下、橋長55・15以  
橋幅4・35以、県指定有形文化財) 写真提供/中村まさあき

「石橋の貴婦人」と呼ばれ、細く長い橋脚が印象的な5連の石造アーチ橋「鳥居橋」(大分県宇佐市)の私の住まいは橋から歩いて約3分の場所にあるが、大雨が降るたびにこの「貴婦人」が気になる。

1997(平成9)年9月は、鳥居橋を流れる恵良川に台風16号による豪雨が一気に流れ込んだ。濁流となつて激しく波打つ水面は、各アーチの最上部付近にまで達していた。そのとき、上流から太い流木が近づいて来るのが見えた。長さは5米以上もあるうか。しかも横向きに。恐ろしい悪魔が貴婦人に迫つて来たのである。

「ああ、神さま仏さま!」。祈るように手を合わせた。すると、天の助けか、流木は90度向きを変えた。そして、橋の中央の一番径間の広いアーチの下に潜り込んで見えなくなった。まともにはづかづかしていたら、橋はどうなっていたら。私は胸をなで下ろすと同時に、何と素晴らしい橋なんだ、との思いに満たされた。この橋は過去に何度も、こうした危機に遭遇しているのだ。

かつて、地元に住む都留清一郎は住民のためを思い、洪水が起きても流されない丈夫な橋の架設を大分の石橋築造の先覚者、松田新之助に頼んだ。すると松田は、その石橋の設計図の作成を都留に要請したのである。それは都留が、この暴れ川の恐ろしさを一番知っている人物だったからだといわれる。彼はそれを自分の天命と思い引き受け、試行錯誤の末に洪水にも耐える石橋を設計した。

橋脚は細く長く、上流側には船の舳先(へさき)のような水切り石を付け、川の流れに架かる中3つのアーチ径間を比較的広く取って水はけを良くし、両端2つのアーチ径間が狭い5連橋。松田は、か細く見える橋脚の上に、石材を行儀良く整列させて積み上げ、美しい石のアーチ橋を組み立てた。

現在、鳥居橋の左岸側は河岸公園となり、アーチの下を通り抜けられるようにしてくれている。間近で石材を見ると、ノミを当てた跡が、100年前に築造に携わった先人たちの息づかいのように感じられる。時に暴れ川と化す恵良川の岩盤の上に、橋は今日も美しい5連のアーチを描いている。

「鳥居橋、よく頑張ってくれて、ありがとう」と声を掛け、ハグしてあげたい。

※向野茂氏(81)は、宇佐市景観審議委員のほか、院内ふるさとガイド教室顧問、院内石橋群景観保全協議会委員を務める。

### 中面の案内

2面 石橋を守るために(4)(軸丸英顕)

3面 石橋訪問記録を2冊の本に(末永暢雄)

4面 石造めがね橋のアーチ設計に関する研究(中村幸史郎)

7面 I♡めがね橋(上塚尚孝)

# 石橋を守るために(4)

会員 軸丸 英顕(熊本県)

写真提供/軸丸英顕

前回まで、洪水を防ぎながら石橋を保存した事例について述べました。今回は、「円滑な交通」を望む声にこたえる手法を取り上げます。

車の大型化や高速化が進む中、石橋を守りながら使いやすい道路を確保するには、幅が広く曲りが緩やかな別の道路(バイパス)を造るか、石橋自体を広く強く改造することが必要です。



写真1 岩戸橋(大分県竹田市)

## バイパス橋を整備した事例

写真1の石橋は大分県竹田市にある「岩戸橋」で、その西側に架けられたバイパス橋の上から撮影しました。石橋上空の鋼橋は、最近開通した新しいバイパス橋、中段の橋は農業用水路です。ここでは、より良い道路とするた

## 「バイパス橋や橋の改造で」守る

めに、再度のバイパス整備がなされています。

熊本県美里町には「二俣五橋」と呼ばれる橋梁(きょうりょう)群(ぐん)と写真2)があり、いろいろな形の橋を見るができます。

写真2右側の「小筵二俣目鑑橋」と左側の「二俣福良渡目鑑橋」は、規模も形もよく似た双子橋で、江戸時代に造られました。二俣福良渡の横には、昭和2年に鉄筋コンクリート製のバイパス橋「新二俣橋」が架けられています。また、右奥には大正13年に造られた石造橋「年杵橋」と、その後交通量増加を受けて昭和45年に架けられた鋼製のバイパス橋「新年杵橋」が見えます。

バイパス橋の整備工事は現在の橋を使いながら実施できることから、用地確保が容易な地方部では多くの事例があります。ただ、新しい橋ができると、川の流れを妨げないよう石橋が撤去される場合があり安心できません。熊本県山都町の聖橋でもバイパス完成後に撤去工事が始められ、これに気付いた地

元の井上清一氏(初代会長)らの働きかけによって名工、岩永三三郎作の大きな石橋は辛くも守られたとの逸話が残っています。

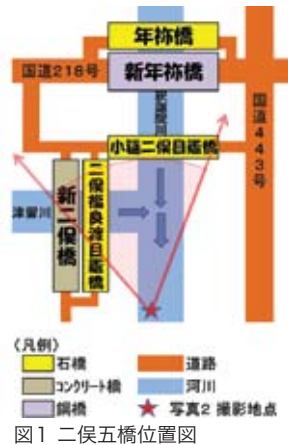


写真2 二俣五橋(熊本県美里町)全景  
左手前が二俣福良渡、奥が新二俣橋、  
右手前が小筵二俣、奥が新年杵橋と年杵橋

## 石橋を改造した事例

バイパス整備が難しい市街部において石橋を残し使っていくには、石橋を改造して幅や強さなど、橋に求められる性能を確保せねばなりません。

熊本県山都町の浜町橋(写真3)は橋の幅を広げた事例で、写真手前が拡

幅された部分です。この改造によって建設から180年以上を経た今でも、町中心部の県道橋として立派に役割を果たしています。

写真4は、明治政府がその威信をかけて建設した国指定重要文化財の日本橋です。今までに何度もの改修が行われ、最近では架橋100年を機に舗装や防水などの補強が実施されました。これらによって、日本橋は必要な性能を加え、現在も都心の交通を支え続けています。



写真3 浜町橋(熊本県山都町)



写真4 日本橋(東京都中央区)

## おわりに

4回にわたり、さまざまな石橋保存の手法を紹介しました。ただ、これらを採用することで工事費用が増える場合も多く、保存する石橋には「投資」に見合うだけの「価値」が求められます。

石橋の価値は、多くの人に愛され地域の資源として使われることで高まります。このため、石橋を守るには、石橋を「生かす」活動を広げることがとても大事になるのです。(完)

# 石橋訪問記録を2冊の本に

副会長 末永 暢雄(長崎県)  
写真提供/末永暢雄

今から13年前、九州各地の石橋を訪る旅を始めました。それから、「石橋を描く生活」になり、2003年には長崎市で「九州の石橋スケッチ紀行展」(個展)を開くまでになりました。このときの展示作品の中から抜粋しまとめた本が、九州の石橋スケッチ紀行」でした。

## 「九州の石橋スケッチ紀行」

この本の制作にはある思いがありました。「石橋って何?」。知人の多くからそんな声を掛けられながら、ただ我武者羅に石橋を描くことに時間を割く毎日を通り過ぎていたのですが、各地の石橋を回り始めてからは、石工のことを知り、周



夢追橋架橋(長崎・佐世保市吉井町、2010年撮影)

辺の豊かな自然に触れ、現地では温かい地域の人たちが会話することができました。そのうち私は、そうしたことを石橋と共に伝えたいという思いを持つようになりました。

この本には九州各地の40基の石橋のスケッチを掲載しています。しかし、そうそう本を出すのは難しい。ただ石橋を見る、描くだけでなく、石橋の調査をして、より多くの人に石橋に関する情報を伝えたい、そう思うようになりました。

## 石橋情報紙「石橋をゆく」

そこで2005年、石橋情報紙「石橋をゆく」の第1号(A4判・1枚)を作成しました。当初は月1回の発行を考えていましたが、伝えたい情報が次々に湧いて月2回になり、やがて不定期発行になってしまいました。それだけ石橋の情報はあふれています。

2016年1月末現在で第187号になっていますが、既刊を読み返す機会にもっと多くの方々に情報をお届けしたいと思い、第100号までを第1集として「石橋をゆく」を製本し、私の石橋を訪ねる旅をさまざまに支えていただ



末永暢雄副会長

た方々に届けました。ただし、中には取材当時の情報をそのまま紹介しているの、その後に分かった情報と違っている内容もあります。例えば第75号の(日本で一番高い橋)と紹介した宮崎・高千穂の「神橋」はその後RC橋であることが分

かりました。石橋周辺にお住まいの方からすると、私の土地勘のなさが表れているところもあるかと思えます。

九州各県を回ると、以外にも橋の趣の違いが見えてくる場合があります。それは石材や石工の技の違いであったり、川の姿の違いによるものでしょう。最近では、九州を離れて本州にまで足を運ぶことが多くなりました

が、各地を訪れると、それぞれの石橋の違いがよく見えるようになりました。本会の皆さんには、それを感じ取っていただきたい。この本の紹介は、そうした意味もあります。

また、「石橋をゆく」は「石橋を守る」ための私なりの行動でもありません。ささいな話題を取り上げている場合も、行政担当者にまで伝わっているようで、最近では調査依頼や情報提供を受けるようになりました。それがまた、次の情報紙の継続につながります。

## ◇石橋情報紙「石橋をゆく」(第二集)

2015年刊(残数20部のみ)  
A4判・全102ページ・モノクロ  
1500円(送料込み)

## ◇九州の石橋スケッチ紀行

2003年刊  
A4判・全72ページ・カラー  
2300円(送料込み)

ご希望があれば郵便で、①本のタイトル②希望冊数③氏名④〒住所⑤電話番号をご記入の上、末永暢雄〒859-1632 佐世保市吉井町踊瀬720-1宛にお申し込みください。



九州の石橋を訪ねる旅(福岡県朝倉市の秋月眼鏡橋にて2014年撮影)

# 石造めがね橋のアーチ設計に関する研究

会員 中村 幸史郎(熊本)

中村幸史郎会員(熊本)は昨年6月、熊本市中央区の熊本大学で開催された土木学会において、「石造めがね橋のアーチ設計に関する研究」と題する研究発表を行った。同氏は、江戸時代後期の石工や大工などの職人たちがアーチを構成する輪石の数や寸法を算出する方法として、日本で独自に発達した数学である「和算(わさん)」と、曲尺(かねじゃく)を道具として使う「規矩術(きくじゆつ)」があったと指摘。古文書の記載内容を紹介し、石造めがね橋のアーチ設計方法を明らかにした。「土木史研究講演集VOL35 2015年」(土木学会発行)にまとめられた講演内容を著者本人の監修を経て、ここに紹介する。(広報部)

## 1 はじめに

川面に映る2連のアーチがめがねのように見えるところからめがね橋と称されるようになった。石造めがね橋については姿の優美さから多くの人々に親しまれ、熊本県においては国内最大の規模を誇る霊台橋や、用水路として現在も使われている通潤橋には多くの見学者が訪れている。

これらの石造めがね橋の建設に関する記録は、霊台橋に関しては弘化4(1847)年に書かれた「半七日記」、通潤橋に関しては布田保之助の「通潤橋仕法書」が残されている。

「通潤橋仕法書」は橋の規模や水路設

る直線を水平に引くことでアーチの形が描けるが、水平線の位置によって、半円になったり緩やかな曲線を描いたりする。

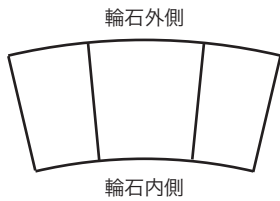
この特性をうまく生かして川幅が広い場所では緩やかな曲線、さらに広くなる連続したアーチを構築している。逆に山間部では川幅が狭く谷が深いところでは半円もしくは立ち上がり気味のアーチで造り、地形に即した橋のかけ方を行っている。このため設置場所ごとに川幅と路面の高さなどの条件が違うため、アーチの形状や輪石の大きさが異なる。

計について詳細に記載されているが、アーチを構成する輪石の寸法については3尺の厚さのみが記載されているに過ぎない。輪石の列と寸法についての記載は見られず、石工集団の極秘事項としてめがね橋設計にかかわる根幹についての記録は残していない。  
ここではアーチを構成する輪石の数と寸法をどのようにして算出したかを考える。

## 2 アーチと輪石の形状

石造めがね橋の基本はアーチである。このアーチをどのようにして描き、輪石を刻んだかが最大の課題である。アーチの形状を求めるには円を描き、円に接す

輪石の大きさを決めるには、アーチ部分の輪石の内側と外側で得られた円周(円弧)の長さを輪石の数で割って得た数値が輪石1個の寸法となる。このとき内側と外側では円周に差が生じる、このためアーチ部分の輪石の形状は基本的に外側が広く、内側が狭い逆台形をしている。



## 3 円弧の算出方法

幕末から明治時代にかけて、西洋文化と共にわが国に伝えられた西洋数学では、アーチの計算は円周率と円弧の半径および中心角によって求めることができる。

きる。

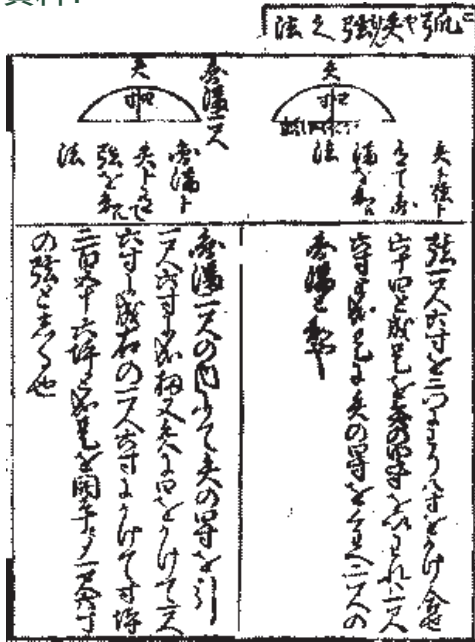
かつて九州大学の太田静六教授の手により熊本県の霊台橋をはじめ九州各地に残る石造めがね橋の実測図が作成されている。これら実測図にはアーチの中心点を描き、左右の橋脚の基礎部分に向かって直線を伸ばしアーチの中心角が求められた痕跡を見ることができ。これはアーチの円周を求めるための作業で、全円に対する比率でアーチ(円弧)の長さを割り出し、輪石の寸法を求めたものであるが、アーチの設計と輪石の寸法の算出はできなかつたと述べられている。<sup>\*1</sup>

西洋の数学が伝わる以前の江戸時代前半、わが国では関孝和に代表される和算の数学者たちにより独自の数学が発展を遂げている。

和算の中でも円弧に関するものを「弧矢弦術」として詳細な研究がなされており、例題を示しながら解説する書物を残している。寛永16年(1639)、今村知商によって書かれた「豎亥録(じゆがいろく)」には円弧の計算式が書かれており、解説書として寛文2年(1662)に弟子の安藤有益が「豎亥録(仮名抄)」を書き、円弧に関して具体例を示して計算方法を解説している。

明暦3年(1657)には初板重春によって書かれた「円方四巻記」が出されている。また寛文7年(1667)、多賀谷

資料1



(1)半円の高さと幅から円の直径を出す法

(資料1右より)  
弦1尺6寸を2つにわり8寸をかけ合わせ64と成 是を矢の4寸を以てわれば1尺6寸と成 是に矢の4寸をくわえ2尺の円満を知る也

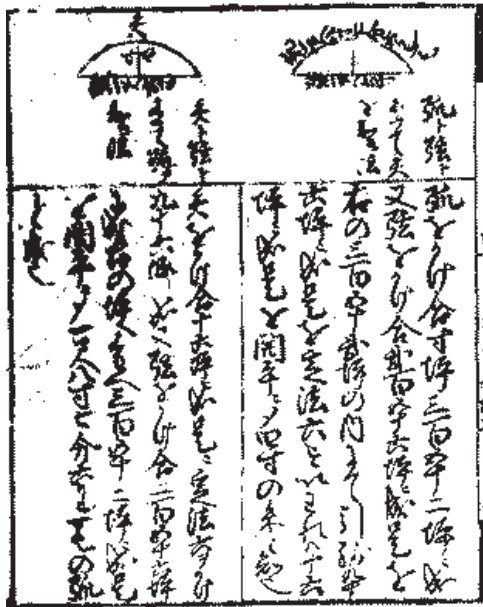
計算すると以下のようになる。  
弦=16 矢=4

$$\begin{aligned} 16 \div 2 &= 8 \\ 8 \times 8 &= 64 \\ 64 \div 4 &= 16 \\ 16 + 4 &= 20 \end{aligned}$$

円の直径=2尺  
これを数式に直すと次のようになる。

$$\text{円の直径} = [(\text{弦} \div 2)^2 \div \text{矢}] + \text{矢} \dots \textcircled{1}$$

資料2



(2)半円の高さと幅から円周を出す法

(資料2左より)  
矢をかけ合わせ16坪に成 是に定法6をかけ96坪と知る也 弦をかけ合わせ256坪に成 右の坪に加え352坪に成 是を開平にして1尺8寸7分6厘1毛の弧を知る成り

計算すると以下のようになる。  
弦=16 矢=4

$$\begin{aligned} 4 \times 4 &= 16 \\ 16 \times 6 &= 96 \\ 16 \times 16 &= 256 \\ 96 + 256 &= 352 \\ \sqrt{352} &= 18.761 \end{aligned}$$

円周(円弧)=1尺8寸7分6厘1毛  
是を数式に直すと次のようになる。

$$\text{円弧の長さ} = \sqrt{(\text{矢}^2 \times \text{定法}6) + \text{弦}^2} \dots \textcircled{2}$$

4 和算における円弧の計算

経貞によって「方円秘見集」が出されている。これらは円弧に関して計算式を明らかにしているが、それぞれにわずかながら違いを見せている。

弧矢弦術では、円周率を使わずに半円の円周(弧)や幅(弦)、高さ(矢)を求めることができる計算式を明らかにしている。ここでは「円方四巻記 巻二」の一部を紹介し、計算式を明らかにする。

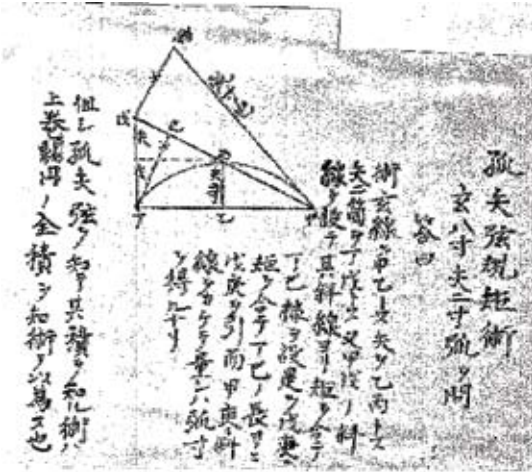
資料1の(1)は「半円の高さと幅から円の直径を出す法」、資料2の(2)は「半円の高さと幅から円周を出す法」である。

この他にも弦、矢などを求める式もあるが、石造めがね橋のアーチと輪石の設計に関しては資料1・2の①と②の式で求めることができる。

資料1の①式では、川幅と路面の高さを現地の地理的条件に合わせて決めておけば、アーチの本来の直径も求めることができ、石積を行う際の型枠(土保工)の曲線を定めることを容易に行うことができる。

資料2の②式では、円弧の長さを出すことができ、輪石の厚みを上乘せして計算すればアーチ輪石の外側と内側の円弧の長さが求められ、その長さを輪石の数で割れば輪石1個の寸法が求められる。

資料3



(資料3より)  
 孤矢弦規矩術  
 弦8寸、矢2寸 弧間図庚甲斜を量て答曰く  
 術弦線を甲乙とす 矢を乙丙とす 矢2個  
 丁戊とす 又戊甲の斜線を設けてその線より  
 矩を合わせて丁己の長さ戊庚を引き 庚  
 甲斜線を懸け是を量れば弧の寸を得る也  
 但し孤矢弦を知ってその積を知る術欠円  
 の全積を知る術を以て為すなり

孤矢規矩術の図に寸法を充てて計算上確認  
 すると以下のような結果となった。  
 弦8寸、矢2寸で孤矢規矩術の図に当てはめると  
 弧の長さが9寸6分3厘となるが、数式で求めると  
 次のようになる。

弦線 甲乙(丁)8寸、 矢 丙乙2寸  
 $8^2 + (2 \times 2)^2 = 80$  (甲戊線)  
 $\Delta$  戊己丁のうち直線戊丁 =  $4^2$   
 直線己丁 =  $(3.59)^2$   
 直線戊己 =  $(1.764)^2$   
 $4^2 = (3.59)^2 + (1.764)^2$   
 $16 = 12.8881 + 3.1117$   
 $16 \div 15.9998$   
 直線己丁 =  $(3.59)^2$ となる。

従って直線戊庚も  $(3.59)^2$ となる。  
 直線 (甲戊)<sup>2</sup> + (戊庚)<sup>2</sup> = (庚甲)<sup>2</sup>の式が成り立つ。

$\sqrt{(80 + 12.8881)} = \sqrt{92.8881}$   
 $\div 9.63$   
 9寸6分3厘となる。

6 和算と規矩術の誤差

和算で規矩術の数値を入れ込んで計算すると以下  
 のような結果が得られた。

弦8寸、矢2寸における弧の値  
 円弧の長さ =  $\sqrt{(矢^2 \times 定法6) + 弦^2}$   
 弧 =  $\sqrt{(24 + 64)}$   
 $= \sqrt{88}$   
 $= 9.380831$   
 $\div 9.380$

弧の長さは、9寸3分8厘となる。  
 このことから和算と規矩術では和算が短く、規矩術  
 に数値の伸びが認められる。

5 規矩術における円弧の算出方法

大工の棟梁(とうりょう)が行う計算  
 方法で、曲尺を使って円弧の長さを求め  
 る孤矢規矩術がある。

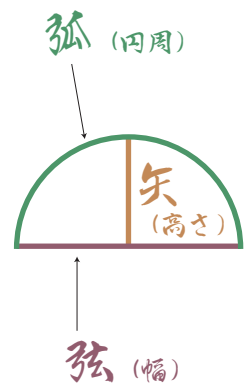
天明8年(1788)、溝口内匠源林卿  
 著の「方円順度」において孤矢規矩術の  
 図解がなされている(資料3)。

資料3の方法であれば、計算をせずに  
 弧長が得られる。弧長に輪石の厚さを加  
 えて再度図化すれば、輪石の内側と外側  
 の円弧が得られ、それを輪石の数で割れ  
 ば輪石1個の寸法が得られる。

(左の「6 和算と規矩術の誤差」につづく)

7 まとめ

川幅と路面の高さを決めれば、いとも  
 簡単に円弧の値が得られることが明らか  
 になったが、ここで得られた数値に準  
 じて石を刻むことは困難である。尺・寸・  
 分までは刻めるが、厘・毛の単位は刻む  
 ことはできない。そこで端数をそろえた  
 数値で石を刻み、端数処理した数値の合  
 計を輪石の中心にある楔石(要石)で調  
 整している。輪石の中でも一段と大きく  
 造られた楔石が見られるのはそのため  
 である。



謝辞 本文掲載の機会などご配慮いた  
 だいた柏原市教育委員会石田成人氏と  
 熊本大学田中尚人氏には記して感謝申  
 上げます。

参考文献

- \*1 大田静六「九州のかたち眼鏡橋・西洋建築」  
西日本新聞社 昭和54年
- \*2 拙稿「石造めがね橋の設計に関する研究」  
『肥後考古』14号 2006
- \*3 拙稿「石造めがね橋の設計に関する研究」  
『肥後考古』15号 2007
- \*4 資料1~3 東北大学図書館所蔵資料

# 和而不同 下鶴橋(熊本・御船町)

御船町(熊本県上益城郡)の下鶴橋の橋脚部を「傍観」でなく「凝視」しながらイラスト風に描きたくて、右岸上流側の坂を下った。

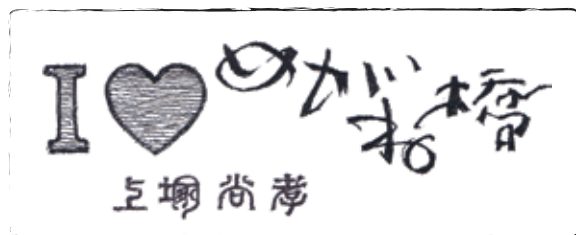
まず、用意してきたはさみで橋脚部周辺を覆う草木を剪定(せんてい)した。ツクサの群青色の花はほほ笑みかけてきたので残した。橋脚部の輪石の並びに相對した場所に立ち、広範囲を視界に入れようと後退するが、5以下がるのがやつと。後方は八勢川の水音が足下に響く。そんな位置から向き合う橋裏の石材群のあみだくじ模様は、気合い負けしそうな迫力で、これは架設時の石工衆によって注入されたエネルギーなのだろう。

石工、橋本勘五郎が明治15年に記した「木ノ倉下露目鑑橋架設目論見帳(もくろみちよつ)」には、「目鑑橋渡り拾三間」(約23・4呎)、「中三間」(約5・4呎)とある。スケッチブックを広げたまま、振り返って対岸のアーチ脚部へ目をやると、基礎部の辺りはスカートの裾のように広がっている。

橋裏を描き始める。まず基礎石を眺めると見え隠れして約10個が並ぶ。その下は岩盤だろうからはしご胴木の設置は不要だったろう。2段目に並ぶ11個の輪石の上は横長の巨石を含め8個が並び、すり合わせ(接合面)は真一文字の水平

線。その上の段も同様のすり合わせとなっている。

水平真一文字に並んだ石材に見ほれていると、石工養成講座で指導された竹部光春師匠の言葉がよみがえってくる。



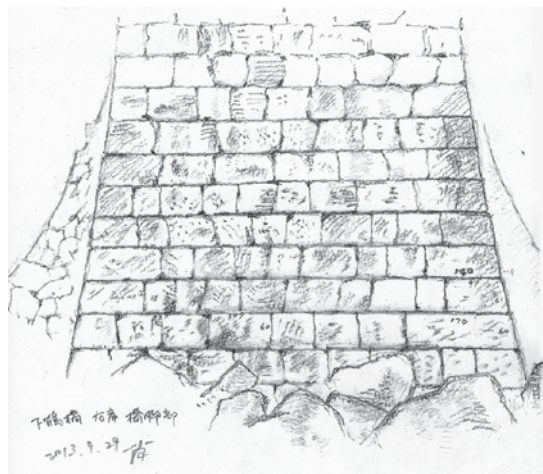
「石材を据ゆるときにや、上の段、さらに上の段と重めるわけだけん、上の石の重量で下に据えた石がずれたり傾いたりせんごつ、裏込め石を差し込んでおかないやたらん」

また、隣接する石材同士の接合点は2カ所必要と、指導されておられたのを思い出し、橋本勘五郎を筆頭に数多くの石工衆の詳細かつ念入りな技

が、築造から120年余り経過しても水平真一文字のすり合わせを維持しているのだと感心して見つけた。

下鶴橋は、勾欄(こうらん)の彫り物や円柱手すりの造作を見ると、装飾性の高いめがね橋だと思われがちだけれど、橋脚部へ下りて石材の積み方を観察すると、すり合わせの水平直線の見事

な繰り返し技に驚嘆する。1886(明治19)年架橋されたこの橋の工事に従事した石工衆の基本に忠実な技は、同年代の他のめがね橋でも見ることが可能なのかと思うほどの出来栄である。鉛筆を走らせながら、今から50年前の若き日、「カメラに頼らざる旅」と題して同人誌に書いた文を思い起こした。



輪石の中の巨石の計測を試みた。長さが小生の身長と同じ170センチあり、山都町の浜町橋の橋脚部の石材も同サイズだったことを思い出す。幅は60センチ。輪厚は85センチもあり、通潤橋(同町)の90センチに迫る。

スケッチブックに計測値を記入した後、6段目の並びから再び描き始めた。輪石の下から上に向かってわずかずつ狭くなる。ずっと見上げた姿勢でいたら首が痛くなってきたので10段目でやめた。「イラスト」という言葉は、「説明図」とも訳されるようだ。描きながら、輪石が形成する橋裏の小ささまざまな石材の幾何学模様を見つめ、「和而不同」和して同じからず、の世界を建造物に反映した盤石の石積みに関心する。描ききれなかつた橋裏の高いところは、天蓋(てんがい)と称してよかるう。ここもやっぱ

り「和而不同」の世界が続く。径間23・7呎の石造めがね橋の橋裏のあみだくじ模様を形成し、120年以上も維持している。

撮影時は視野全体を把握したと思いつながら、実は被写体を自分のものとして心が捉えていない。単に目に映る程度で、「凝視」にはほど遠い。せつかく眼前に展開するたぐいまれな色や形や質感を、なぜ心で捉えないのか。

何とか基礎石の並びから上へ5段ほど描き、休憩。用意してきたメジャーで下鶴橋は明治の石造めがね橋の金字塔と言えよう。(2015年8月5日)

## 熊本の石橋を網羅

### 「熊本の目鑑橋345」

上塚尚孝事務局長(熊本県・東陽石匠館名誉館長)が熊本県内のめがね橋をあらためて現地取材しまとめた、「熊本の目鑑橋345」がこの3月、熊本日日新聞社から刊行される。

現在80歳の上塚事務局長のこれまでの調査・研究成果を基に各橋に解説が付けられ、四季折々の表情を見せる橋の写真は次男の寿朗氏が撮影。石橋とともに現地を訪れる際に役立つよう周辺



榊 晃弘撮影「十橋(へんきょう)」  
中華人民共和国・山東省泗水県東部泉林鎮

## 石橋のなる風景

眼鏡橋の架橋技術は本当に中国から日本へ来たのだろうか。中国の友人から、「外国人が広大な中国各地に散在する橋を一人で探するのは不可能です」と言われたが、どうしても自分の目で確かめたかった。

取材では、レンタカーの走行距離が1日700キロを超える日もあった。さまざまなアクシデントもあったが、2010年3月〜14年4月の4年間で、中国の隋から清までの時代の代表的な古橋をほぼ取材できた。



榊 晃弘写真集  
中国の古橋(こきょう)  
花乱社  
2016年3月1日 発行  
定価(本体5,200円+税)

現地では橋の多様性はむしろのこと、そのスケールの大きさに圧倒された。その中から165カ所の橋を選んでこの3月、中国の古橋を日本に紹介する初の写真集を刊行した。  
上写真の「十橋」は金代(1181年)重建、明代(1581年)に重修。橋長25メートル、橋幅6メートル。2011年3月、日の出の時刻に撮影した。(文)榊 晃弘

## 熊本県立矢部高校生徒 石工の技術を体験学習

江戸期築造の通潤橋がある熊本・山都町の県立矢部高校緑学科の2年生7人が今年2月5日、緑地広場(同町)で石材加工などを体験。石橋を地元の誇りにしてもらいたいと、本会が企画し実現した。(広報部)



体験風景 写真提供/尾上一哉

### 大会情報

第37回大会を大分県宇佐市院内町で開催  
2016年5月14・15日、院内文化交流ホール(院内支所そば)

【訃報】浦田勝美氏(熊本)が、2015年10月27日永眠。享年60歳。元事務局次長。会報の編集・制作を担当。

## 日本の石橋を守る会

～石橋とその文化を大切に～

会報88号(通算) 2016(平成28)年3月7日発行

代表者 会長 甲斐 利幸  
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2  
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360  
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>  
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>

## 編集後記

大分県の鳥居橋が築造1000年。海外からその技術が日本に伝搬した石造アーチ橋ですが、同橋は、人々の思いと現地の技術が見事に融合・発展した、石造文化の華であると言えるでしょう。  
軸丸英頭会員の「石橋を守るために」は、今回号でついに最終回。石橋を現地保存するためのさまざまな方法を学ぶことができ、古い石橋を生かす活動の重要性を再確認できました。  
かねてより病氣療養中だった元事務局次長の浦田勝美氏が永眠(享年60歳)されました。流失や撤去などで消失した石橋に向けられた視線が印象的でした。ご冥福をお祈りします。

(会報担当) 中村まさあき